

マハトマ・ガンディーと原子爆弾
—核抑止論と非暴力運動の意味

外川 昌彦

広島大学大学院国際協力研究科

広島大学平和科学研究センター兼任研究員

**Mahatma Gandhi and Atomic Bomb: Nuclear Deterrence and
the Meanings of Nonviolence Movement**

Masahiko TOGAWA

Graduate School for International Development and Cooperation,

Hiroshima University

Affiliated Researcher, Institute for Peace Science, Hiroshima University

Abstract

This paper deals with the discourses by Mahatma Gandhi over the atomic bomb dropped at Hiroshima and Nagasaki during World War II, and analyzes his political view through the background of the international relations when the war was terminated and independence of India was going to be realized.

The paper first analyses Gandhi's hesitation and strange delay to make his message on the atomic bomb public, and discusses the international relations as the background, in which the British government was going to accept India to obtain independence, and there were still concerns about the expansion of political influence by the United States over Asian countries to replace, and a growing tendency towards the policy of nuclear diplomacy.

With the beginning of cold war, the doctrine of nuclear deterrence started to wear reality, but Gandhi was restraining to the people's overconfidence on its effectiveness, and called the people's attention to the facts that the atomic bombs were already used in the war, and the first nuclear test after the end of war was carried by the United States Army at Bikini on July 1st, 1946.

1. はじめに

本稿は、マハトマ・ガンディーの原子爆弾をめぐる発言を、第二次世界大戦が終結しインドの独立が具体的な姿を取り始めた当時の国際情勢に位置づけることで、究極の暴力装置として登場した原子爆弾についてのガンディーの認識と対応を検証する。冷戦とともに高まる核抑止論の時代に、その核抑止への人々の過信をけん制するガンディーの思想的立場を明らかにし、戦後の平和主義の歴史におけるその先駆的な意義を考察する。

本稿の構成は以下の通りである。はじめに、ガンディーの原子爆弾に関する発言には興味深い遅れやためらいが見られることを指摘し、その背景に、当時のインド人指導者に共有された、大戦後に影響力を拡大するアメリカの対アジア政策への懸念を指摘する。つぎに、1946年2月以降のガンディーの原爆に対する発言と対米認識を跡付け、その背景として、独立運動の最終段階を迎えたインドとアメリカとの関係を検証する。そして、核抑止論の批判へとガンディーが踏み込む1946年5月以降の状況を、当時の原子爆弾をめぐる世界の情勢と原爆外交に傾斜してゆくアメリカ、及び独立運動をめぐるインド国内の情勢に位置づけて検証する。最後に、1946年7月1日に、日本への原爆投

下を論じた論説「原子爆弾とアヒンサー」を公表したガンディーの意図を検証する。

それでは、はじめに究極の暴力として登場した原子爆弾に対するガンディーの発言として、代表的な記事を見て見よう。

第二次世界大戦で原子爆弾が初めて使用された時、それでもガンディーの非暴力主義は有効なのかと、多くの人々がガンディーに問いかけた。¹ 特に米英の専門家は、あらゆる通常兵器を圧倒する原子爆弾で、むしろ核の抑止という究極の非暴力が実現するのではないかと、ガンディーに問いかけたのである。しかし、それに対するガンディーの回答は、次のようであった。²

世界に激変が起こった。それでもなお私は、真実と非暴力を信奉しつづけていられるだろうか。原子爆弾は私の信仰を爆破してしまわなかつたらうか。それは爆破されなかつた。それのみではない。真実と非暴力というこの双生児が、世界における最も強大な力であることがいっそう明らかになった。その前には、原子爆弾もかたなしである。(『ハリジャン』1946年2月10日号)

原子爆弾によって、他のいかなるものによっても実現できなかったアヒンサー（不殺生、非暴力）がもたらされるだろうと、アメリカの友人たちから言

い出されている。彼らの言うことが、原子爆弾の破壊力にいや気がさしたので、世界はここしばらくは暴力から遠ざかることになるだろうという意味なら、たしかにそうであろう。しかしそれは、ぜいたくなご馳走を吐き気がするほど食べた人がしばらくはご馳走に背を向けて、むかつきがおさまると、急に倍する食欲でがつつと食べ始めるのによく似ている。まったく同じように、世界はいや気が解消すれば、勢いも新たに暴力に立ちもどるにちがいない。…

(『ハリジャン』1946年7月7日号)

ここには、非暴力運動を通してインドの独立を導いたガンディーの力強い信念が表明されている。前者の記事では、原子爆弾の恐るべき破壊力によっても、インドの独立運動で実践された真実と非暴力への信念は、いささかも揺るがないと語られる。後者の記事では、原子爆弾の破壊力を前に人々が一時的に暴力を使うことをためらったとしても、それで本当の非暴力が実現することはないと論じている。

この記事の検討は改めて行うが、原子爆弾の破壊力の前に、しかし、それにたじろぐことのない力強いメッセージは、非暴力主義の提唱者であるガンディーの面目躍如というべきだろう。最初にこの文章を日本に紹介した、元同盟通信社特派員の蠟山芳郎氏は、次のように述べている。³

「これは、まさに人間の品位、威厳の強烈な示威にほかならなかった。そして、その迫力は今もなお強い力でわたしに迫るように思われる。…原文の no effect を『かたなし』と訳してみたが、わたしはこの文章を読むといつも、空全体をまっくろにおおった原子雲がしだいに薄らいでいって、そのあとの大空に、ガンジーのシルエットがくっきりと浮き彫りにされてくる思いがするのである。」

ところで、実はガンディーが、原子爆弾に対してまとまった論考を表明したものはとても数が少ない。特に後者の記事は、1946年7月の『ハリジャン』誌に掲載された「原子爆弾とアヒンサー」という論説の一部であるが、対話集会やインタビューでのコメントを除けば、ガンディーが原子爆弾についてまとまった見解を表明した論文としては、ほとんど唯一のものである。

また、前者の記事は、同年2月の『ハリジャン』誌の記事であるが、その明確な主張にもかかわらず、これは編集後記欄の雑誌再刊の経緯を説明する文章の中におかれている。⁴ 末尾に M.K.G. のイニシャルが添えられただけで、著名入りの論説とは明らかに異なる扱いである。『ハリジャン』誌は、1933年にガンディーが創刊し、その誌名は自らが名づけたインドの「不可触民」(ハリジャン)に由来する。1942年8月のクウィット・インド運動でガンディーが投獄され、同誌もまたイギリス当局によって発禁処分を受けていたが、それが再刊されたのが1946年2月であった。

すなわち、原子爆弾の脅威に対する力強いメッセージとは裏腹に、この記事は、あたかも編集後記の余録として、時勢を慨嘆して見せた、という感が拭えないのである。

インドにおける原爆投下の報道は、おおむね1945年8月8日には、各誌で大々的に報じられた。たとえば全国的な英字紙である『ステーツマン』は、ハリー・トルーマン大統領(Harry S. Truman, 1884-1972)の原爆投下の声明とともに、「世界で最も恐ろしい破壊兵器」の威力を詳細に報じている。⁵

その後もインドでは、大戦の終結と原子爆弾の威力が繰り返して報道され、新たな政治的状況が議論された。たとえば初代インド首相となっ

たジャワハルラル・ネルー（Jawaharlal Nehru, 1889-1964）は、終戦翌日の8月16日のインタビューで、現代文明を破壊に導く可能性を持つ原子爆弾への懸念を表明している。⁶

しかし、それに対してガンディーの原爆に対するコメントは、前者の記事が原爆投下の6ヵ月後、後者の記事では、実に11ヵ月後のことである。このガンディーの原爆投下に対する論評の遅れと奇妙なまでのためらいは、何を意味しているのだろうか。

2. ガンディーの沈黙

はじめに、ガンディーの原爆投下に関する見解を求めた例として、1945年9月21日の記事を見てみよう。この時にロンドンのタイムズ社は、「無実の中国人とインド人の捕虜に対する日本の残虐な振る舞いから、ガンディーが原爆の使用を是認する見解を表明した」という情報についての、事実確認の問い合わせを行った。しかし、それに対するガンディーの回答は次のようであった。⁷

「原子爆弾についてのいかなる公式の見解も表明していない。ガンディー」

ガンディーはここで、新聞社の情報を否定するとともに、原子爆弾へのいかなる見解も表明していないと言明する。逆に言えば、この機会にガンディーは、世界に向けて原子爆弾に対する自らの意見を表明することができたはずなのだが、それをすげなく断っているのである。

当時のインドの新聞は、連日のように大戦終結と原子爆弾の軍事的・政治的な意味を取り上げ、また原子爆弾をめぐる国際社会の論評を紹介した。たとえば、イギリスを代表する哲学者

で平和運動家でもあるバートランド・ラッセル（Bertrand Arthur William Russell, 1872-1970）が8月18日にイギリスの新聞に論評を寄稿すると、それは2日後にインドの新聞にも転載された。⁸ ラッセルらの多くの知識人が人類に対する原子爆弾の脅威を論じる中で、しかしガンディーは自ら発言を封じ、沈黙を守っていたのである。

同年10月26日の、アメリカ通信社の記者プレストン・グルーバーへの私信で、ガンディーはその理由を、次のように説明している。

親愛なるグルーバー

あなたの手紙を手元におきながら、私は、何をなすべきなのかを考えています。考えれば考えるほど、ますます原子爆弾について、私は何も語ってはならないと感じるようになります。もし可能なら、私は行動しなければなりません。それゆえ、あなたが、もしすぐれたジャーナリストであるなら、この事について私が沈黙を守ることを、助けてくださるものと思います。

私の健康状態は、申し分のない状態です。ご心配いただきありがとうございます。

敬具

この手紙からガンディーは、原子爆弾について関心がないからではなく、むしろ重大な関心を抱いてこの問題について考えているからこそ、この時点ではまだ、公の場でそれについて論評はせず、沈黙を守るのだと述べている。⁹ さらに、それを語る事が可能になれば、同時に何らかの行動を起こす必要があることも、ここには示唆されている。

実は、この私信に先立つ8月24日には、グルーバーにあててガンディーは、次のように書いていた。¹⁰

長くあなたの電報への返信をしなかったことについてお許しください。あなたは、この返信が遅れた理由として、私のためらいや懸念を非難されることでしょうか。私はその答えを知っています。しかし、少なくとも私は、それを直ちに公表することはできません。世界はまだ、私の意見に耳を傾けようとはしないでしょう。それゆえ、あなたには払い戻しが受けられるように、この返信用の電報票をお返しいたします。

ここではグルーパーが、『タイムズ』紙よりも早い段階で、ガンディーに対して返信用の電報票とともに、その見解を求めていたことがわかる。ガンディーはこの時点ですでに自らの「答え」を用意していながら、しかしそれを直ちに公表することはできないと述べているのである。¹¹

ガンディーが原爆投下について沈黙を守っていた1945年8月以降は、第二次世界大戦が終結し、世界が新たな冷戦時代へと向かおうとする時期であった。特にインドでは、民族独立への機運が高まり、同時に独立後のインドのあり方についての熾烈な政治交渉が開始されていた。その複雑な過程を一言でまとめることはできないが、当時の独立に向けたインドの政治情勢を概観すると、次のようになるだろう。

1945年7月にイギリスでは政権交代が起こり、インドの独立に強固に反対したウィンストン・チャーチル首相（Winston Leonard Spencer-Churchill, 1874-1965）に代わり、より穏健な労働党のクレメント・アトリー（Clement Richard Attlee, 1883-1967）が首相となる。第二次世界大戦が終結し11月にはインド国民軍将校の裁判が開始され、インド独立への国民的な機運が高まるが、同時に独立後のインドの具体的な姿については、ムハンマ

ド・アリー・ジンナー（Muhammad Ali Jinnah, 1876-1948）のパキスタン運動をめぐり混迷が深まってゆく。国民会議派とムスリム連盟は、年末の選挙でそれぞれ安定多数を確保して、独立交渉における2つの代表政党という構図が確立するが、このことは未解決のコミュナル問題が、独立への大きな障害となることを示していた。

イギリス政府は、1946年2月にインドに閣僚使節団を派遣し、その提案に基づいて8月にはネルーを首班とする中間政府を組織する。しかし、制憲議会の構成をめぐるネルーとジンナーの対立は最後まで解決せず、インド・パキスタンの分離独立が避けられないものとなるのである。

ガンディーが原子爆弾について沈黙を守っていたのは、ちょうどこのような時期にあっている。すなわち、大戦の終結とともに、霧の彼方にかすんでいたインドの独立が目の前に近づいてくるのだが、その輪郭が明らかになるにつれて、しかしそれは、ガンディーが期待したものとはまったく異なる、恐ろしい姿を見せるようになるのである。

このガンディーの原子爆弾への発言の遅れについて早くから注意を喚起していたドイツのインド史家ローテムントは、その理由を次のように説明している。

「原爆投下のニュースを耳にした時点で、すぐにガンディーは、それに対する自らの見解を公表すべきであった。しかし、インドでの非暴力運動の現実的な限界を自覚し、また英国、ソビエト、米国の邪悪な連合国がインドを引き続き支配下におくために原子爆弾を使用するのではないかという恐れから、聖者としての倫理観ではなく、責任のある行動という政治家としての責務から、ガンディーはこの長い期間、

沈黙を守っていたのである。」[Rothermund 1992: 115]

ここでローテムントは、ガンディーの原子爆弾に対する沈黙の理由を、①非暴力運動の限界、②連合国のインドに対する原子爆弾の使用への恐れという、2点から説明する。

確かにこの時期は、大戦の終結によるアジア諸国の独立への機運の高まりとともに、大戦に勝利した連合国が、ベトナムやインドネシアでの再植民地化の動きを見せていた。インド国内の状況については改めて検討するが、もし新たに開発された原子爆弾がインドの独立運動を妨げる可能性を持つとするなら、それを未然に回避しようとするガンディーの政治的判断は合理的なものといえるだろう。

しかし、すでに多くの知識人が原子爆弾の脅威を論じている中で、ローテムントが指摘する理由だけで、ガンディーがそれまでの非暴力への信念を改めて表明することにまで、なぜ躊躇する必要があったのかという疑問は残されるだろう。特に、原子爆弾を背景とした植民地支配の脅威に対して沈黙したという説明も、植民地統治の不正義と闘い、命を賭して非暴力運動を実践することの意義を説き続けていたガンディーの姿を見ると、なおそこには、検証の余地が残されていると思われるのである。¹²

すなわち、ローテムントの指摘では、原子爆弾を手にしたアメリカへの刺激を恐れてそのコメントを控えたという理由を説明することは可能だが、しかしそれだけでは、アメリカによる原爆の使用を非人道的な行為として厳しく批判した論評を、その後のガンディーが公表した理由を説明することはできないだろう。

日ごろから臆病でいることは暴力よりも悪いと語っていたガンディーが、冷戦と核の抑止という新たな時代を前に沈黙を選び、「それで

もなお、私は真実と非暴力を信奉しつづけていられるだろうか」と、自問し続けていた理由はどこにあるのだろうか。

そこで次節では、ガンディーの沈黙の背景として、独立の最終段階を迎えたインドとアメリカとの関係を検証することで、インドの民族運動指導者によるアメリカの対アジア政策への懸念を指摘する。特に、初代首相ジャワハルラール・ネルーには、第二次大戦を通してイギリスに代って影響力を増大させたアメリカに対する、強い懸念を見ることができよう。

3. ネルーの対米認識

ネルーは、もともとアメリカを、「帝国主義の過去の重荷から比較的自由」な国であり、インドの独立運動への理解者として肯定的に捉えていた。¹³ 実際、日本の軍事侵攻がインドに迫った1942年前半には、イギリスによるインドへの権力移譲をアメリカが仲介することを期待し、1943年のベンガル飢饉でも積極的な支援を望んでいた。¹⁴ しかし、アメリカの不干渉政策はそれを裏切り、冷戦時代の幕開けによるアメリカの対アジア政策の変化によって、それは深い疑念に変わってゆく。

たとえば、1945年10月に、ネルーはインドネシアでオランダ軍が用いた武器が、ラベルを剥がしたアメリカ製であることを痛烈に批判し、また、インドネシアやインドシナにおける東南アジア方面軍のインド人部隊の使用に対して強い怒りを表明した。¹⁵ その懸念は、大戦に勝利したアメリカが、その後もアジアへの影響力を保持し続けるのではないかという、当時のインド民族主義者の疑念を代弁するものとなっていた。

実際、大戦終結後の東南アジアは、連合軍の占領下に、1945年8月にはスカルノが、9月にはホー・チミンが独立宣言を行ったが、マウントバッテンが指揮する東南アジア方面軍には、最盛期には約36万人のインド人部隊が展開し、ジャワやスマトラに3師団、インドシナに1師団が派遣されていた。¹⁶ そのため、国民会議派書記長J.B. クリパラニーは、10月には東南アジアでのインド人兵士の使用が独立運動を弾圧するものであると強く非難し、副首相ヴァッラフバーイ・パテール（Vallabhbhai Jhaverbhai Patel, 1875-1950）は、旧植民地国に対し、「アジアから出て行け」（クウィット・エイジア）を新たなスローガンにすべきだと公言した。¹⁷ インドネシアのムスリム同胞のおかれた状況に懸念を抱いたジンナーも、この点では国民会議派の指導者と数少ない意見の一致を見た。¹⁸ 東南アジアに展開されたインド軍は、連合国によるアジアの再植民地化に、自ら手を貸すものと批判されたのである。

こうして12月30日には、会議派執行委員会、東南アジアの状況は旧植民地国による再植民地化の動きであるという非難決議を採択し、その動きを間接的に助長するものとして、アメリカに対しては遺憾の意が表明された。¹⁹ それは、大戦後のインド自身の運命をも左右する問題として受け止められたのである。

第二次世界大戦で連合国は、英領インドをその最も強力な後方支援地のひとつとして戦った。²⁰ 具体的には、戦時下のアメリカ軍への衣料や糧秣の供給に限っても、その金額は5億1,672万ドルに及んだ。当時インドには、132万人の英米人が在留し、70の訓練施設が設置され、中国への輸送機が発着可能な7つの大型航空基地を含む、200の飛行場が建設された。連合国への莫大な後方支援によって、大戦後にイ

ンドはイギリスへの債務を返済し、なお12億ドルもの債権を残したのである。

これらのことは、疲弊したイギリスに代わりアメリカが、アジアに新たな覇権を確立するという懸念をインドの民族主義者の間に生み出してゆく。特に大戦後のアメリカ軍の対アジア戦略は、それを裏付けるものと見なされたのである。

たとえば、アメリカ空軍ヘンリー・アーノルド将軍は、1945年11月に、新たな原子爆弾に対処する空軍戦略計画を公表し、その中で海外での優良な空軍基地の必要性を強調した。²¹ 当時の原子爆弾は、巨大な重量と運搬技術の制約から、実戦での使用は大型爆撃機による投下に限られていた。また、マンハッタン計画の責任者で知られるレスリー・グローブス少将のもとで、アメリカ軍首脳は、ユーラシア大陸におけるアメリカの空軍戦略を練り直し、インド亜大陸を横断する航空路の確保を検討した。²²

実際に、年末にはイギリス政府に対し、極秘裏にインド領内の駐留基地の確保を要請するが、それは具体的には、カラーチーとカルカッタ（コルカタ）近郊の二ヶ所の航空基地であった。²³ すなわち、図一1（本論文巻末）のように、1945年にアメリカと協定が結ばれたサウジアラビアのダーラン空軍基地と並び、インドのカラーチーとカルカッタの航空基地は、大西洋のカサブランカからユーラシア大陸を横断し太平洋のマニラとを結ぶための、航空戦略上の拠点とされたのである。

結果的に、アメリカ当局による基地確保の要請はイギリス政府によって却下されるのだが、インド亜大陸におけるアメリカの軍事的影響力の高まりは、インドの民族主義者たちにとって、新たな帝国主義の継承者としてのアメリカへの懸念を裏書するものと見なされたのであ

る。²⁴

1945年12月30日の演説で、ネルーはアメリカとソ連を、「強大な膨張主義者」と呼ぶと、次のように批判した。²⁵

アメリカ合衆国は、何らかの形でイギリス帝国の継続を助長するものとして現れている。近年の情勢は、アメリカが、おそらくささやかな外見の変更とともに、この帝国を引き受けようとしていることを示しているようだ。それは、あらゆることに関して重大な結果をもたらす、ひとつの大きな決断となるだろう。なぜなら、この不確実な世界ではいかなる事も確実だという意味で、アジア諸国が喜んで帝国や帝國的な支配に身をゆだねるようなことはなく、むしろそれに対して抵抗を行うであろう事は、まったく確かなことであるからだ。それは原子爆弾でさえも押さえ込むことができない情熱に支えられた、何百万人もの人々による継続的な闘争となるだろう。

ネルーはここで、アメリカがイギリスの帝国主義を受け継ぎ（underwrite）、アジアでの支配を継続する可能性について言及する。しかし、その選択によって引き起こされる、植民地支配に対する新たなアジアの人々の闘争は、「原子爆弾でさえも押さえ込むことのできない」ものになると、強い口調で述べている。²⁶

このネルー演説は、ボンベイ（ムンバイ）のアメリカ領事ハワード・ドノバンによって、ただちにワシントンに打電される。そこには、「インドの民族主義的指導者によって公的に表明された、アメリカのインド政策に対する、最も厳しい批判のひとつ」とコメントされた。²⁷ そして、このスピーチに呼応するように、1946年1月から2月にかけて、インド民衆の間での反米感情は高まりを見せ、アメリカの駐留軍人、教会、外交官などへの暴動が頻発することにな

る。²⁸

以上のような、ネルーを中心としたインド民族主義者の対米認識を見てゆくと、アメリカによる核を用いた独立干渉への懸念が、ガンディーが原子爆弾への言及を避けた理由であると説明を、裏付けているように見える。そこで次に、この間のガンディーの動向を検討する。

4. 原子爆弾の脅威—1945年11月から1946年2月

1945年8月29日に、インドへのアメリカの支援について意見を求めた米国下院議員エマニュエル・セルラーに対して、ガンディーは、インドの独立のためにアメリカができることは、その妨げにならないようにすることだ、と書き送っていた。²⁹ 同年10月には、アメリカのアジア政策への批判に対して行われた、トルーマン大統領による大西洋憲章の再確認の演説に対しては、「インドの人々にとっては、それは不十分な回答である」と述べていた。³⁰ しばしば、「文明はそのマイノリティへの扱いによって評価される」と語っていたガンディーは、アメリカにおける人種問題には特に注意を払い、インドの不可触民でさえも、アメリカの黒人のような法的差別は受けていない、とも述べていた。³¹

これらの事実は、大戦終結後のアメリカの影響力拡大への懸念を、ガンディーもまた共有していた可能性を示しているだろう。

ところで、ガンディーが初めて、対話集会で原子爆弾（atomic bomb）に言及するのは1945年11月29日である。それは非暴力に対置される破壊力の象徴として、次のように表現された。³² 「たとえ外国から直接に侵略を受ける

恐れが無くとも、私たちは、巨大な機械の支配のもとにいる人々の奴隷となるのだ。原子爆弾を見なさい。原子爆弾を所持している国は、その友人たちからさえも恐れられている。」

ここでガンディーは、圧倒的な機械文明の支配におかれた人類の運命を象徴するものとして、原子爆弾に言及する。また、1946年1月20日には、オリッサでの民衆暴動が見せた無秩序ぶりや暴力至上主義を強く非難し、それで「究極の野蛮な暴力である原子爆弾」と立ち向かうつもりなのか、と酷評する。³³

しかし、これらの発言は、対話集会での一般的な暴力の象徴として原子爆弾に触れるに留まり、それも公表された資料では上記を含めて3点だけである。³⁴ 原子爆弾についてのまとまった論考としては、やはり冒頭で紹介した1946年2月10日号の『ハリジャン』紙が初出である。そこで、以下にこの記事引用する。³⁵

原子爆弾は私の信仰を爆破してしまわなかっただろうか。それは爆破されなかった。それのみではない。真実と非暴力というこの双生児が、世界における最も強大な力であることがいっそう明らかになった。その前には、原子爆弾もかたなしである。二つの相反する、まったく種類を異にした力がある。一方は道徳的な精神の力であり、他方は物理的な物質の力である。前者が後者よりすぐれていることはくらべるまでもない。他方にはその本性上終わりがあるが、一方の精神の力はつねに前進してやなまいし、終わりが無い。もし完全に開花すれば、それはこの世界における征服すべからざる力となるだろう。…精神のすぐれた力は皮膚の色になんら関係なく、男にも、女にも、子供にも、あらゆる人々のなかに宿っているということをつけ加えておきたい。ただ多くの人々においては、それが休眠状態にあるというだけのことであって、思慮分別をもった訓練によっ

て休眠から目ざめさせることが可能である。さらに私は、この真実を認め、この真実を実現するためにそれ相応の努力を払わなければ、自己破滅からの逃げ口はどこにもないと言いたい。…

この記事には、一種の三段論法を見ることができよう。単純化すれば、①世界は物理的な力と、精神の力よりなっている、②物理的な力には終わりがあるが、精神の力は永遠である、したがって、③究極の物理的な力である原子爆弾によっても、精神の力である非暴力は破壊されない、ということになる。³⁶

真実が実現されなければ自己破滅からの逃げ口はないというガンディーの言葉は強く訴えるものがあるが、同時に精神の力は、多くの人々においてはまだ休眠状態にあるとも指摘されている。うがった見方をすれば、精神の力を目覚めさせない限りそれは現実的な政治的命題とはならず、むしろ自らの信念を改めて述べているに過ぎないものとなる。原子爆弾の破壊力に対抗する具体策が提示されていないという意味では、実質的にはガンディーは沈黙を続けているのと同じことになるだろう。

このことは、その一週間後に公表された同じ『ハリジャン』紙の記事と対比させると、より明瞭となる。³⁷

今日、あなたが考慮しなければならないのは、単独のイギリスではなく、ビッグ・スリーである。あなたがたは、彼らの武器をもってしては、彼らと有効に戦うことは出来ない。最終的には、あなたは原子爆弾を超えることはできないのです。暴力が台頭する時代遅れの場所で、あらゆる種類の帝国主義と戦う新たな方法を持つことが出来ない限り、この世界の被抑圧民族に希望は存在しない。…インドの大衆は、たとえ自分たちに必要な訓練が与えられたと

しても、武力で立ち上がろうとはしないだろう。しかし、日本のような第一級の軍事国家が、一撃で武装解除されたような時に、私たちの支配者が私たちにそのような訓練を与えてくれると考える事は無意味なのだ。今日、日本は征服者の足元にひれ伏している。しかし、非暴力に敗北はないのだ。

ここでビッグ・スリーとは、米国、ソ連、イギリスを指す。ガンディーは、原子爆弾の圧倒的な破壊力に言及すると、既存のやり方では最終的には「原子爆弾を超えることはできない」と指摘し、「世界の被抑圧民族に希望は存在しない」と述べている。第一級の軍事国家である日本でさえも原子爆弾の一撃で武装解除された時に、インドがどうしてそれに抵抗できるのか、と述べているのである。

当然のことながら、帝国主義という「時代遅れの場所」で長年にわたり格闘してきたガンディーが、それをたやすく乗り越えられると考えていた訳では無いだろう。しかもガンディーは、それに対抗する手段として、精神の力を開花させる可能性にしかまだ言及していない。むしろ、邪悪な帝国主義が原子爆弾を手にした時に、インドもまた日本のように「征服者の足元にひれ伏す」かもしれないという懸念を表明するのである。

ここには、長年にわたる植民地闘争を経験してきたガンディーの、極めて現実的な見通しを見ることができるだろう。³⁸ 確かに、ここにも「非暴力に敗北はないのだ」、というメッセージは述べられているが、その具体的な根拠が示されている訳では無いのである。

以上から、原子爆弾に対して自らの見解を初めて公表した1946年2月の記事には、その後、原爆を所有した新たな帝国主義へのガンディーの懸念が指摘される。この時点でガンデ

ィーは、それに対抗する具体策には言明せず、ただその破壊力にもたじろがない精神の力というこれまでの主張を、くり返すにとどまっていた。その原子爆弾に対する具体的な処方箋についてガンディーが語り始めるのは、同年5月以降のことである。

そのガンディーの見解を検討する前に、当時の原子爆弾をめぐる世界の情勢と、独立を前にしたインド国内の状況について整理しておきたい。

5. 原子爆弾をめぐる状況

(1) 冷戦と核開発

1946年前半は、大戦の終結に伴う混乱から冷戦の構図が姿を現した時期であった。2月のジョージ・ケナンの長文電報や3月のチャーチルの「鉄のカーテン」演説によって、米ソの対決が現実のものとして意識され、原子爆弾による第三次世界大戦の可能性がささやかれる中で、東西冷戦の構図が姿を現してゆく。アメリカは、原爆の独占による軍事的優位と5年以内にソ連も原爆を開発するという予測の下で、ヨーロッパやアジアで高まるソ連との緊張に対処することになる。

このような原子爆弾をめぐる当時の西側の外交政策は、平和利用をめざした国際管理と、核の独占という状況を利用した原爆外交という、2つの潮流がせめぎあっていた。

たとえばイギリスでは、政権交代直後で原爆の使用を漠然としか知らされていなかったアトリー首相は、広島の大破壊によって初めて原爆の恐ろしさを理解し、原子力の国際的な管理を協議する首脳会談をトルーマン大統領に要請する。³⁹ しかし、アメリカとの軍事協定によ

る安全保障の追及を主張したチャーチルは、「鉄のカーテン」演説の中で、原爆を国際機関にゆだねることは軽率であり、分裂に向かう世界にその秘密が放り出されることは、「犯罪ともいうべき狂気の沙汰」と述べていた。⁴⁰

当時の国際社会は、核兵器の登場と東西の冷戦という新たな状況に対して、原子力の平和利用から核を用いた予防戦争論まで意見の対立が見られ、その後の反核運動のような強力な国際世論は、まだ形成されていなかった。たとえば、イギリスのバートランド・ラッセルは、先述の8月18日の記事で、核燃料の管理を行う国際機関の創設を論じながら、しかし現実的には世界は何度かの戦争を経ることで、核保有国のもとに統一されるだろうという予測を立てていた。⁴¹

実際に、アメリカのトルーマン大統領は、一方では国連での、核兵器の最終的な廃絶を目指した原子力の管理交渉を続けながら、同時に原爆を対ソ外交のカードとする原爆外交を手放そうとはしなかった。原子力の国際管理交渉は、1945年11月の英米加合意宣言、12月のモスクワでの外相会議を経て、翌1月には国連での原子力委員会の設立が決議される。しかし、スターリン (Losif Stalin, 1878-1953) は、この決議の翌日には「全ロシアをあげて」原爆を開発するように指令を出し、トルーマン大統領もまた国際管理の理想をうたいながら、同時に国連での交渉期日にあわせたビキニ環礁での、原爆の公開実験を承認する。⁴²

こうして、国連での原子力の国際管理交渉が行われている最中の7月1日に、原爆の軍事的効果を検証するための公開実験をアメリカ政府が行うという、皮肉な事態となった。国連の記念すべき第一回総会決議である原子力委員会は無実化し、核の拡散防止と核兵器の廃絶に

取り組む最良の機会は失われ、その後の人類は、米ソ対立の冷戦構造のもとで、終わりの無い核兵器の開発競争に邁進することになる。⁴³

(2) インド独立への機運

国際社会がこのような核による米ソ対決の影に怯えていた時期に、インド国内では独立への国民的な機運が高まり、1947年8月の独立に向けた具体的な政治的手続きが議論されていた。その概略は、次のようである。

インド国民軍裁判への抗議に端を発する1946年2月のインド海軍水兵による大規模な反乱は、英領統治の根幹であるイギリス軍の権威を揺るがし、インド独立の国民的な気運が高まった。その背景には、イギリス国内の厭戦気分とともに、インド軍内におけるインド人化の進展や連合軍の撤退開始があった。たとえば、インド軍における将校レベルでのイギリス人对インド人の比率は、1941年の約12:1が、1945年には4:1にまで改善された。⁴⁴ 東南アジアで展開されたインド人兵士も、その後の批判を受けて、1946年1月に段階的な撤退が開始され、4月にはインドによる東南アジア方面軍への後方基地の提供も終了した。⁴⁵ アメリカ軍の戦時下の海外駐留基地も、多くの場合、その期限は3月で終了することになっていた。⁴⁶ その結果、インドからの外国軍の撤退は、インドの独立とともにすみやかに実行される見通しとなるのである。⁴⁷

これらの状況は、米ソ対決の緊張にも関わらず、インド亜大陸からのイギリスの撤退による軍事的空白を埋めるものはインド軍であり、アメリカによる軍事的干渉を懸念する可能性が小さくなったことを示していた。

1946年1月22日にイギリスのアトリー内閣は、インドの独立を協議する閣僚使節団の派遣

を決定し、3月15日の下院の声明で、インドのすみやかな完全独立を約束する。その結果、5月16日に閣僚使節団は、権力移譲のための中間政府と制憲議会に関する提案を公表する。ガンディーはそれを4日間かけて検討すると、「現在の状況では、これはイギリス政府がなしえる最良のものである」と確信し、「彼らの唯一の目的は、できるだけ早くイギリス支配を終えることである」と述べる。⁴⁸ 6月には国民会議派とムスリム連盟の両者が、閣僚使節団の提案について、そのゆるやかな連邦制案を受諾することを表明する。⁴⁹

以上の状況は、これまで沈黙を守ってきたガンディーが、ためらいがちにせよ2月には原子爆弾についての言及を始め、また閣僚使節団が提案をまとめた5月以降に、その主張を明確にしてゆくことに対応する。イギリス政府によるインド独立の政治的意思が明確となり、アメリカによる独立への干渉の懸念が遠のくことで、ガンディーは原爆へのコメントを解禁し、また閣僚使節団の提案によってインドの独立が現実の道筋を見せ、インド国内の情勢も整い始めることで、その主張を明確にしたことを裏付けているだろう。

そこで次に、1946年5月以降のガンディーの発言を検討する。

6. 原子爆弾とアヒンサー

(1) 核抑止論への批判

すでに述べたように、5月以降のインドは、閣僚使節団の提案に従って権力移譲のための中間政府が準備され、独立への道筋が具体的に検討されてゆく。それに符合するようにガンディーは、核抑止論への批判を解禁する。5月9

日の対話集会で、ガンディーは次のように述べている。⁵⁰

質問：先日、プネーで、イギリスに帰国直前のある将校が私に話してくれました。インドには暴力が拡大し、それはとどまるところを知りません。まるで人々は、徐々に非暴力の道を捨て去ろうとしているようです。「私たち西洋の人間は」と彼は言いました。「暴力を信じているばかりでなく、私たちの社会はその上に成り立っているのです。多くの従属的な民族が、暴力を通じてその独立を勝ち取り、今日では平和に暮らしています。私たちは、暴力を止めるためにこそ原子爆弾を発明したのです。先の大戦は、まさにそのことを示しています。」

将校はさらに続けました。「ガンディーは、非暴力の方法を人々に示しました。しかし彼は、人々を一度に非暴力に改心させて平和の支配をもたらした原子爆弾のような、何か強力な力を発見したでしょうか。…もし彼が、今日、国中に広がっている恐ろしい暴力から人々を引き離すことができないならば、彼は失意の人であり、彼の生涯の仕事は台無しになったと言えるでしょう。」

回答：この質問は、多分に混乱を含んだものである。原子爆弾は、暴力を抑止してはいない。人々の心はそのことで一杯になり、第三次世界大戦の準備はむしろそれによって進行していると言ふべきかもしれない。暴力が人類に平和をもたらしたなど言うのは馬鹿げた事であるだけでなく、暴力が何かをなしとげたなどとは、決して言うことはできない…インドにおける非暴力の実験は、かなりの程度、成功したと私は考えている。それゆえ、この質問に示されているような悲観主義が入り込む余地は無い。最終的には非暴力こそが、いかなる力もこの地上から拭い去ることのできない、世界の偉大な原理のひとつとなるのだ。

この記事でガンディーは、核抑止論に対する自らの見解を初めて明らかにする。原子爆弾の脅威による抑止が平和をもたらすというイギリス軍人の発言を取り上げると、それを明確に否定し、暴力が平和をもたらすことはないとする。この対話はヒンディー語から英語に翻訳され、5月19日号の『ハリジャン』紙に掲載されるが、興味深いことにその翌日にガンディーは、先述の閣僚使節団の提案を受け入れるという声明を公表している。

特にこの記事で注目されるのは、ガンディーがインドの独立運動への批判に対して、非暴力の理念はインドにおける独立運動の実践を通して証明されると述べている点である。すなわち、イギリス人将校とガンディーは、インド独立における非暴力運動の意義については正反対の考えに立ちながら、その独立運動の成否によって非暴力主義の正しさが証明されると考えている点では、同様の見地に立っている。⁵¹

続く6月23日の『ハリジャン』紙では、ガンディーは、次のように述べている。⁵²

あるイギリスの友人が、ムスリーに滞在中のガンディーに、原子爆弾の恐るべき脅威は世界に非暴力をもたらすのではないかという質問を投げかけた。もしあらゆる国が原子爆弾で武装したら、それは直ちに全世界の最終的な破滅を意味するので、彼らはそれを使うことを控えるのではないかと尋ねたのである。ガンディーは、そうはならないという意見であった。

「暴力的な人間の目は、現に彼が行うことのできる破壊や死よりも、それをはるかに上まわる大きな破壊や死の予兆を前にして、輝くだろう。」

この記事は、核抑止論に内包された矛盾を示唆するものとして興味深い。すなわち、究極の

暴力による平和の実現という見地は、それによってより小さな暴力は抑止できるとしても、最強の破壊兵器を手にした政策決定者が、ただ抑止力としてのみそれを保持し、決して実戦でその効果を試してみることは無いと言えるのか、という根源的な問いを投げかけているからである。

こうしてガンディーの核抑止論への批判は、第二次世界大戦におけるアメリカの原爆使用の問題へと結びついてゆく。

(2) 「原子爆弾とアヒンサー」

冒頭でも触れたように、論文「原子爆弾とアヒンサー」が公開されたのは、1946年7月である。ここでガンディーは、原子爆弾という新しい破壊兵器が人類にもたらす意味を論じるとともに、それが実戦で使用されたことの歴史的な意味に触れている。その全文は、資料1(本論文巻末)に掲げている。

この記事を、2月10日の文面と対比させることで、次の3点が指摘できるだろう。すなわち、①なぜ、原子爆弾という破壊的兵器が戦争で使用されたのか、②その究極の暴力に対して、人類はどのような対処が可能なのか、③原子爆弾という究極の破壊力の前でも、やはり真実と非暴力は敗れることがないのか、である。

第一は、原子爆弾が使い方によっては人類に恩恵をもたらす発明であり、原子力時代の到来として肯定的にとらえようとする立場への警鐘である。原子力を人類の火の使用にたとえると、それをコントロールするのは人間の精神力に他ならず、それが善用されるという保証がない限り、悲惨な結果を招く可能性があることを指摘する。実際に、核がもたらした惨禍は自然災害などではなく、政治的立場にある人間が行った、破壊を目的とした原爆の使用という政

治的行為の結果であると指摘するのである。

第二は、究極の破壊兵器に対抗する手段としてそれを上まわる新たな暴力を準備するのではなく、そのような政治的意思にどのように対処するのか、という観点を提示する。すなわち、暴力を行使する政治主体の意思を問うことは、原子爆弾の投下を決断したアメリカ政府の政治判断を、問うことに結びつくのである。

もちろんガンディーは、「日本が下劣な野心を貫こうとして行った犯罪を私が弁護しようとしていると早合点しないでほしい」と述べることで、日本の軍事的な野望の弁護を否定する。しかし、それに続く「日本の特定地域の男、女、子供たちを、情け容赦もなく殺してしまうという下劣なことをやってよい権利は誰にも与えられていなかったのだ」という言葉は、原子爆弾を使用したアメリカへの道義的な責任を問うものとなっている。⁵³

最後の論点は、非暴力運動の有効性である。すでに見たように、発言の時期を慎重に選んでいたガンディーにとって、原子爆弾の脅威にも揺るがない非暴力の信念を表明することは、究極の暴力を行使したアメリカ政府への批判を意味していた。ガンディーにとっては、それはインド民族主義運動の最後の段階に現れた、新たな帝国主義の影を引きずるアメリカと、対峙することを意味していたのである。

そのため、ガンディーが日ごろからくり返し述べていた、「人類は、非暴力によってのみ、暴力から脱出しなければならない」という言葉は、ここではアメリカの政治的影響力が払拭され、インドが独立への確実な歩みを踏み出すことで、初めて現実的なメッセージとして世界に発信することが可能となる。言い換えると、原子爆弾を超える手段としての非暴力の実践は、非暴力運動を通じたインドの独立が現実のも

のとなることで、初めて世界の人々への政治的なメッセージとして、表明することが可能となるのである。

実は、アメリカ政府による原爆の使用を批判するこの記事が執筆された7月1日は、アメリカ軍が、戦後、初めてビキニ環礁で原子爆弾の実験を行った日にあたっている。ガンディーは、大戦が終結して初めて行われた核実験の日程に合わせて、生涯で唯一となるアメリカの核政策への批判を行っていたのである。⁵⁴ 最後に、この問題を検討したい。

(3) ビキニ原爆実験をめぐって

ビキニ環礁は、国際的な反核運動の切っ掛けとなる1954年の水爆実験がよく知られているが、7月1日の公開実験では、原爆の威力の誇示を目的に、世界中の報道関係者や国連職員が招待されていた[Weisgall 1994: 1, 177-179]。⁵⁵

原子爆弾について沈黙を守っていたガンディーは、アメリカ軍による戦後初の核実験という機会を捉え、自らの見解を明らかにし、非暴力の有効性を人々に表明した。核兵器への批判的見解を表明するという行動を通してガンディーは、核抑止論に向かいつつある世界の世論に警鐘を鳴らそうとするのである。

そのガンディーによる原爆観の意義を、ここでは同時代の代表的な平和思想家であるバートランド・ラッセルの原爆観との対比を通して検証してみたい。

良く知られるように、1950年にノーベル賞を受賞したラッセルは、しかし大戦直後には、強い反共思想のもとで、ヨーロッパにおける原爆を含む対ソ戦が避けられないものと考えていた。原爆のアメリカによる独占という状況を背景に、ソ連の膨張を防ぐための、対ソ予防戦争論に傾斜してゆくのである。⁵⁶

たとえば、1945年10月にラッセルは、「私としてはナチスがもっていた邪悪な性質を有する政府によって世界が支配されるよりむしろ、原子爆弾を用いた戦争がもたらす混乱と破壊を選びたい」と述べていた。⁵⁷ その見解は、先述の1945年8月18日の記事にも見られるが、その後も様々な機会にくり返され、ノーベル賞を受賞する前の1950年頃までは、ソ連の膨張を阻止するためには核戦争も否定しない、という立場を取っていた。⁵⁸ それは核をとまなう第三次世界大戦への予見として、インドでも紹介されて大きな反響を呼んでいた。

その後の1954年のビキニ環礁での水爆実験と第五福竜丸の被爆は、冷戦下の世界に大きな衝撃を与え、世界的な反核運動を生み出してゆく。反核へと大きく舵を切ったその後のラッセルは、1955年にラッセル・アインシュタイン宣言を公表し、核兵器の廃絶に向けた国際世論のオピニオン・リーダーとして活躍することになる。

それに対して、ガンディーの1946年7月の論文は、多くの人々が新たな核による科学の進歩と核抑止論に期待を寄せていた戦後すぐの段階で、その矛盾を鋭く突くことで、世界の反核思想の先駆的な見地を表明するものとなっていた。

核の抑止による平和の実現という主張は、アメリカ軍がすでに第二次世界大戦で原爆を使用したことで、楽観的な期待に過ぎないことが明らかとなり、その戦争を終結させるために原爆は必要であったというアメリカ政府の説明にもかかわらず、戦後の平和な時代になって初めてとなる核実験を、この時にアメリカ軍は実行したのである。

ガンディーは、その批判的な見地が政治的な有効性を持つまでは沈黙を守り、その時期を選

んで、核抑止論をけん制する立場を表明する。

ガンディーの原子爆弾への発言は、その意味では、ローテムントが指摘するように、単にアメリカを刺激するコメントを控えたという政治的判断の結果ではなく、冷戦とともに幕開けとなる核抑止論の時代に、その抑止論への人々の過信をけん制する意味を持つものであったと言えるだろう。⁵⁹

ちなみにガンディーは、生涯で5回にわたりノーベル平和賞の候補にあげられたが、イギリスの植民地統治下にあった当時のインドの様々な状況から、最終選考では外されていた。インドがイギリスから独立を達成した翌1948年に、ようやくその受賞が現実味を帯びるのだが、しかし、ガンディーは、同年1月30日に凶弾に倒れることでそれは実現せず、ノーベル賞選考委員会は、後にそれを後悔することになる。⁶⁰

7. まとめ

(1) 現代インドとガンディー

それでは、本稿で検証されたガンディーの原爆投下に対する見解は、現代のインド社会の理解にどのような示唆を与えるのだろうか。

確かに、インド政府による核開発の歴史を見ると、独立後のインドの核政策は、ネルーによる核廃絶への表明から、1974年のインディラ政権（Indira Priyadarshini Gandhi 1917–1984）の核実験を経た印パの核開発競争へと至る、ガンディー的な非暴力主義からの後退の歴史として理解される。実際、1998年5月のインドの核実験が、五大国による核独占の矛盾を明らかにするものだというインド政府の説明は、しかし、具体的な核廃絶の道筋を示さない

限り、その批判の矛先はすぐに自らに跳ね返るものと言えるだろう。⁶¹

しかし、それにも関わらずガンディー的な理念が、今もなおインド社会に与える象徴的な意味は否定できないだろう。

たとえば、1998年のインド核実験で副大統領クリシュナ・カントは、その中止を求めた広島市長平岡敬と会談すると、「マハトマ・ガンジーが生きていたら、『核兵器は保有すべきだ。ただし使うべきではない』と言っただろう」と釈明した。⁶² また、核実験の責任者であった国防相ジョージ・フェルナンデスは、反核平和運動を指導した経歴を持ち、その執務室には常にヒロシマの廃墟とガンディーの写真を掲げている、と公言した。⁶³

ここでは、逆説的ではあるが、核実験の正当性を人々に説明するためにも、今もインドでは、ガンディー的な理念が無視できないという状況が指摘されるだろう。⁶⁴ 独立運動に体现されたガンディー的な理念は、現代インドの政治意識においても、常に参照され、一定の象徴的な意味を担うものと言えるだろう。

(2) ヒロシマの報に接して

最後に、ガンディーがヒロシマの惨劇について語った、1946年9月の記事を検討しておきたい。⁶⁵ インドの独立と人類の未来について質問されたガンディーは、次のような確信に満ちた様子で話している。⁶⁶

ガンディー インドは、独立の途上にある。ムスリム連盟と国民会議派とに合意があろうとなかろうと、独立は達成されることになる。それを止めることは誰にもできない。それはインドの運命なの

だ。…

記者

世界は進歩しているのでしょうか。現代世界において、生活と生存競争を容易なものとすることは、人類の本能と感覚を麻痺させることにはならないでしょうか。

ガンディー

もし、それがあなたのコメントなら、私はそれに同意しましょう。

記者

それでは、原子爆弾は？

ガンディー

ああ、その点についてなら、私が確信を持っているということ、何のためらいもなく全世界に向けて宣言できるでしょう。最も人道に外れた科学の使用として、男、女、子供たちへの大量破壊のために原子爆弾が使われたことを、私は残念に思っているのです。

記者

それに対する処方箋は？ それは非暴力を、時代遅れのものとしてしまったのでしょうか？

ガンディー

いや。非暴力こそが、原子爆弾が破壊することのできない、唯一のものなのです。私が初めて、原子爆弾によってヒロシマが壊滅したことを聞いた時、私は顔の表情ひとつ変えませんでした。その反対に、私は自分自身に言い聞かせたのです。「今こそ世界が非暴力を採用しなければ、それは間違いなく人類の自滅を導くことになるだろう」と。

このインタビューで、ガンディーは初めて、「ヒロシマの壊滅」に言及する。原子爆弾こそ人道に外れた科学の使用であり、非暴力の道を進まない限り人類は自滅に向かうと、「全世界に向けて宣言できる」と述べている。

しかし、本稿で検証した資料を見てゆくと、「ヒロシマが壊滅したことを聞いた時、私は顔の表情ひとつ変えませんでした」というガンディーの言葉を、やはり額面通りに受け取ることはいできないだろう。当初からガンディーはヒロシマへの原爆の投下に対して、それは人道に悖る行いとして、深い憤りと懸念を抱いていた。それにも関わらずガンディーは、1年以上も前に聞いたヒロシマの惨劇について、ここで「顔の表情ひとつ変えませんでした」と述べているのである。少なくともガンディーはその話を聞いた時点で、すぐに原爆が人類に与える影響への懸念を、表明することはできたはずである。⁶⁷

本稿で明らかにしたように、原爆について発言を求められた時のガンディーの奇妙なためらいと沈黙は、自己破滅を導く強力な兵器の出現に対して、それまでの非暴力の理念が、それでもなお人々に説得力を持つとガンディーが確信を得るまでに、要した時間の長さであった。

すると、「顔の表情ひとつ変える」ことなくガンディーが、ヒロシマの惨劇を語るのに1年以上も要したという経緯は、原子爆弾で一瞬にして壊滅したヒロシマの報に接した時のガンディーの、その驚愕の深さを現すものと言えるのではないだろうか。

<謝辞>

本稿の内容の一部は、2010年7月4日に、NIHU 現代インド地域研究・龍谷大学拠点、京都大学拠点、京都大学グローバル COE、及び関連する科研の合同ワークショップにおいて報告された。研究代表者の長崎暢子先生、杉原薫先生、及び参加者の方々には、様々なコメントと示唆を頂いた。この場をお借りして謝意を表したい。

<参考文献>

- Barua, Pradeep P. (2003) *Gentlemen of the Raj: The Indian Army Officer Corps, 1817-1949*. (Westport: Praeger Publishers).
- Bourke-White, Margaret (1950) *Interview with India: In the words and pictures of Margaret Bourke-White* (London: The Travel Book Club).
- Clymer, Kenton J. (1990) Jawaharlal Nehru and the United States: The Pre-independence Years., *Diplomatic History*, 14, pp. 143-161.
- Clymer, Kenton J. (1995) *Quest for Freedom: The United States and India's Independence*. (New York: Columbia University Press).
- Fischer, Louis (2008 [1951]) *The Life of Mahatma Gandhi*, (London: Harper Collins Publishers).
- Gosh, Amitav (1998) Countdown: Why Can't Every Country Have the Bomb? *New Yorker*, 26 October and 2nd November, 1998.

- Gandhi, Mohandas Karamchand (1958) *The Collected Works of Mahatma Gandhi*, New Delhi Publications Division, Ministry of Information and Broadcasting, Government of India
- Leffler, Melvyn. P (1992) *A Preponderance of Power: National Security, the Truman Administration, and the Cold War*, (Stanford: Stanford University Press).
- Mansergh, Nicholas, editor-in-chief (1970-1983) *The Transfer of Power 1942-7*, (London: H.M.S.O.).
- Nanda, B.R. (1985) *Gandhi and his Critics*, (Delhi: Oxford University Press).
- Nehru, Jawaharlal (1946) The Death Dealer, *National Herald*, editorial 1st July appeared on 2nd July 1946.
- Patel, Sardar Vallabhbhai (1998) *The Collected Works of Sardar Vallabhbhai Patel*, Vol. XIII, P.N. Chopra (ed.), (Delhi: Konark Publishers).
- Rothermund, Dietmar (2009 [1992]) *Mahatma Gandhi: An Essay in Political Biography*, (New Delhi: Manohar).
- Venkataramani, M.S. and Shrivastava, B.K. (1983) *Roosevelt, Gandhi, Churchill: America and the Last Phase of India's Freedom Struggle*, (New Delhi: Raidant Publishers).
- Voigt, Johannes H (1987) *India in the Second World War*. (New Delhi: Gulab Vazirani).
- Weisgall, Jonathan M. (1994) *Operation Crossroads: The Atomic Tests at Bikini Atoll*. (Maryland: Naval Institute Press).
- 伊藤融 (2007) 核保有の論理とその内外への影響—南アジア各時代の年、『アジア研究』、Vol.53、No.3、pp. 43-56。
- 小野修 (1977) バートランド・ラッセルと対ソ予防戦争論、『広島平和科学』、1 号、広島平和科学研究センター。
- スミット・サルカール (1993) 『新しいインド近代史—下からの歴史の試み』、長崎暢子・臼田雅之・中里成章・粟屋利江訳、研文出版。
- セン、アマルティア (2008) 『議論好きなインド人—対話と異端の歴史が紡ぐ多文化世界』、佐藤宏・粟屋利江訳、明石書店。
- 高橋博子 (2008) 『封印されたヒロシマ・ナガサキ—米核実験と民間防衛計画』、凱風社。
- 外川昌彦 (2012) 想起される「ガンディー」—バルタ・チャタジーの市民社会批判とマハトマ・ガンディーにおける非暴力思想の形成、『国立民族学博物館研究報告』、36 巻 2 号、pp. 181-226。
- 外川昌彦 (2010) ガンディーが歩いた道—1946年のノアカリ暴動と今日の南アジア、『季刊・民族学』、2010 年、131 号、pp. 40-45。
- 長崎暢子 (1989) 『インド独立—逆光の中のチャンドラ・ボース』、朝日新聞社。
- 長崎暢子 (1996) 『ガンディー: 反近代の実験』、岩波書店。
- 西岡達裕 (1999) 『アメリカ外交と核軍備競争の起源—1942-46』、彩流社。
- 堀本武功 (1997) 『インド現代政治史—独立後半世紀の展望』、刀水書房。
- 堀本武功 (2002) 90 年代における印米関係の展開、『現代南アジア 3—民主主義へのとりくみ』、堀本武功・広瀬崇子編、東京大学出版会。
- 前田寿 (1968) 『軍縮交渉史 1945-1967 年』、東京大学出版会。

前田哲男監修・グローバルヒバクシャ研究会編
著（2005）『隠されたヒバクシャ検証＝裁
きなきびキニ水爆被災』、凱風社。

牧野財士（1999）ノーベル平和賞失墜者—マハ
ートマー・ガンディー、『サルボダヤ』、日印
サルボダヤ交友会、第10-11月号、pp.29-33。

宮元静雄（1985）『東南アジア連合軍の戦後処
理：第二次世界大戦における』、東南アジア
連合軍の終戦処理刊行会。

蠟山芳郎（1979）ガンジーとネルー、『ガンジ
ー・ネルー』、世界の名著・第77巻、中央公
論社。

¹ ガンディーの正式な名前は、モーハンダース・カ
ラムチャンド・ガーンディー（Mohandas
Karamchand Gandhi）であるが、ここでは通称に従
って、マハトマ・ガンディーとした。

² February 2, 1946, CWMG, vol.83, p. 77.、及び
July 1, 1946, CWMG, vol.84, pp. 393-394.。なお、
以下のガンディーの記事については、執筆の日付、
CWMG(*The Collected Works of Mahatma Gandhi*)
のページ、及び必要に応じて雑誌の刊行日などの関
連情報を付記するものとする。また、2月10日号の
記事については、引用の都合から、蠟山芳郎氏の訳
文をそのまま採用した[蠟山 1979]。たとえば、truth
は、一般には真理と訳されるが、ここでは真実とし
ている。なお、非暴力を実践したガンディーの生涯
については、長崎[1996]の紹介が優れている。

³ 蠟山[1979: 8]。

⁴ February 10, 1946, p. 8, in *Harijan: A Journal of
Applied Gandhism 1933-1955*, vol. X, 1946, ed by
Joan Bondurant, New York: Garland Publishing,
1973.

⁵ *The Statesman*, August 8, 1945.

⁶ *The Statesman*, August 19th, 1945.

⁷ September 21, 1945, CWMG, Vol. 81, p. 271.

⁸ 8月18日の記事は、Bomb and Civilization,
Amrita Bazar Patrika, August 20, 1945, Calcutta
(初出は、*Forward*, August 18, 1945, Glasgow.)。パ
ートランド・ラッセルのその他の論評については、
注57を参照されたい。

⁹ ガンディーが、広島の大惨劇について特別な関心を
抱いていたことを示すエピソードとして、次の話が
知られている[Nanda 1985: 158-159]。広島への原爆
投下の後、間もなくしてネルーがガンディーを訪ね
た時、ガンディーは、原子爆弾の製造方法や殺傷能
力、放射能被害、日本の都市での死傷者数などにつ

いて詳しく質問した後で、この無慈悲な破壊は自ら
の神と非暴力への信仰を確かなものとし、神によっ
て与えられた聖なる使命の真の意味を理解した、と
述べていた。ネルーの言葉によれば、その時のガン
ディーの目は、「まるで啓示を受けたようであった」
という。

¹⁰ August 24, 1945, CWMG, Vol. 81, p. 163.

¹¹ その後も11月4日には、ガンディーは三度目の
グルーバーへの返信を行い、改めてそれを公表する
ためには時間が必要であると説明している。

November 4, 1945, CWMG, Vol. 82, p. 21-22.

¹² ガンディーにおける非暴力思想の形成とその特
徴については、拙稿[外川 2012]を参照されたい。

¹³ 'Nehru Warns Against New Crisis in India.'
Hindustan Times, October 29, 1945.

¹⁴ Clymer 1990.

¹⁵ 'Nehru Warns Against New Crisis in India.' *The
Hindustan Times*, October 29, 1945.

¹⁶ Voigt 1987, p. 276、宮元 1985, p. 117.

¹⁷ Voigt 1987, p. 276. また、図一2（本論文巻末）
に、パテールの発言に基づいた当時の風刺画を掲載
した。（*The Hindustan Times*, December 8, 1945.）

¹⁸ Voigt 1987, p. 276.

¹⁹ CWMGのVol. 89、p. 457.

²⁰ Barua 1992, p. 125.

²¹ この計画は、インドでもすぐに報道され
た。'Defence against Atomic Bomb', *The Hindustan
Times*, November 13, 1945; 'Defense against Atom
Bombs.' *Amrita Bazar Patrika*, November 14,
1945.など。

²² Leffler 1992, pp. 55-59. Leffer 1984, p. 353.

²³ Mansergh, ed., Vol. 6, p. 644; vol. 7, p. 266.
Clymer 1995, p. 241.

²⁴ Mansergh, ed., vol. 7, p. 266. イギリスの拒否の
理由を、Clymerは、インドにおけるアメリカの影響
力の増大に対するイギリス政府の懸念があったと指
摘する[Clymer 1995: 240-242]。なお、冷戦初期の
アメリカにとっての南アジアの戦略的な重要性は、
天然資源や地政学的な観点から軍関係者やCIAによ
って様々に報告されていたが、外交政策全般から見
ると、それは欧州、極東、中東に対して、周辺的な
位置にとどまるものであった[McMahon 1994:
11-35]。

²⁵ SWJN, No. 14, pp. 406-417.

²⁶ SWJN, No. 14, pp. 408. 同様の発言は、有名な
『インドの発見』のあとがきにも見られる。Nehru,
1956, p. 584.

²⁷ 米国国立公文書館、RG59, 845.00/1-246,
845.00/1-446. なお、その後の経緯の詳細は明らか
ではないが、この演説の3週間後に、ネルーによる
アメリカの対インド政策への批判はトーン・ダウン
し、それはアメリカにおける「様々な傾向の中のひ
とつ」と修正された[Clymer 1995: 233-237]。その
理由をClymerは、ネルーのアメリカへの外交的配
慮の結果であり、ネルーの疑念が払拭された訳では
ない、と述べている。（2009年7月12日の筆者への
私信から）

²⁸ Clymer 1995, pp. 245-246. なおこれらの事件は、
インド国民軍裁判に対する当時の国民的な抗議運動

を背景としているため、人種的な背景も無視できないと考えられる。

²⁹ CWMG, Vol. 81, p. 180.

³⁰ Clymer 1995: 235.

³¹ Fischer [2008: 527-528], December 1, 1945, CWMG, vol. 82, pp. 150-153. CWMG, Vol. 84, pp. 424, July 8, 1946. 実際にガンディーは、トルーマン大統領がインド人移民帰化法に著名したことを聞くと、すぐに在米インド人連盟会長の J.J.シンに手紙を書き、その写しを送るように依頼している。July 6, 1946, CWMG, vol. 84, p. 416. また、日本軍がビルマ国境に迫った 1942 年 5-6 月に、アメリカ軍がインドに駐留することを承認するにいたるガンディーの動向については、長崎[1989: 170-185]が詳しい。

³² November 29, 1945 CWMG, Vol. 82, pp. 132-135. これは原文はヒンディー語であり、セヴァグラムでの対話集会の内容が、後にヒンディー語雑誌 (*Khadi Jagat*, December 1945) に掲載されたものである。

³³ January 20, 1946, CWMG, Vol. 83, p. 4-5. これは、オリッサでのスピーチの一部であり、この記事が『ハリジャン』紙に掲載されたのは 2 月 24 日である。

³⁴ 3 点目は、1946 年 1 月 30 日の学生との対話集会の記事であるが、これはマドラスの英字紙 (*The Hindu*, February 1, 1946) に、掲載されたものである [CWMG, vol. 83, pp. 56-58].

また、日付の上での初出として、建設的プログラムの前書きに、次の一文がある。Training for military revolt means learning the use of arms ending perhaps in the atomic bomb. For civil disobedience it means the constructive programme. (13, November, 1945)

³⁵ February 2, 1946, CWMG, vol.83, p. 77.

³⁶ この議論はその後、ダルマと調和したサットヴァ (純質) としての非暴力と、ダルマに調和しないラジャス (激質) としての原子爆弾の対立という、哲学的議論へと展開される。CWMG, Vol. 88, pp. 167-169, June 17, 1947.

³⁷ On or after December 25, 1945, CWMG, Vol. 82, pp. 277-279. もともとこの記事は、12 月 25 日以降に行われた国民会議派党員との対話集会の内容であるが、発禁処分となっていた『ハリジャン』紙の再刊に合わせて、2 月 17 日号に掲載された。

³⁸ 実際にガンディーは、第二次大戦後の米ソの対立が新たな戦争に発展する可能性について懸念を深め、「ヨーロッパは次の大戦に向かいつつあるように見える」と述べている。June 26, 1946, CWMG, vol.84, p.377; July 8, 1946, CWMG, vol. 84, p. 424.; July 17, 1946, CWMG, vol. 85, p. 7-11. など。

³⁹ この間のアトリー首相の原子爆弾への反応とトルーマン大統領への働きかけについては、西岡 [1999: 111-169]が詳しい。トルーマン大統領に英米首脳会談の開催を要請した書簡では、アトリー首相は、「いまや世界はまったく新しい状況に直面している... これらの爆弾は遅かれ早かれ、互いを全滅させることのために使用されるでしょう」と述べていた [西岡 1999: 112-113]. しかし、やがてアトリーも、国際管理の議論は国内世論への対応にとどまるものとなり、実質的にはチャーチルの立場に近づくこと

になる。

⁴⁰ 西岡[1999: 218].

⁴¹ Bomb and Civilization, *Amrita Bajar Patrika*, August 20, 1945.

⁴² 西岡[1999: 200; 280].

⁴³ 前田[1968: 69-72].

⁴⁴ Barua 2003, p. 130.

⁴⁵ 具体的には、1946 年 1 月から 10 月にかけて 13 万人、1947 年 1 月までに 7 万人の規模に縮小される計画となった [宮元 1985: 117]. 後方基地の提供については、宮元 [1985: 58-59, 74-77, 108-109].

⁴⁶ Leffler 1992, pp. 56.

⁴⁷ Voigt 1987, p. 278-285. 最終的な部隊の撤退が完了するのは 1948 年 2 月である。なお、イギリス人将校の一部は、インド、パキスタンの両国に、しばらくは軍事顧問として留まった。

⁴⁸ May 20, 1946, CWMG, vol. 84, pp. 169-172. なお、閣僚使節団の国民会議派との交渉には、インド人兵士の国内での防衛任務とイギリス人兵士のインド内駐留の問題が含まれていた (Mansergh, ed., vol. 7, p. 266.).

⁴⁹ しかし、ネルーとジンナーを軸とした権力移譲の討議は、良く知られたコミューナル問題で難航を続け、公表された計画案についても中間政府の構成という点では合意が得られず、結果としてそれは、8 月のネルーによる国民会議派単独での中間政府の構成と、それを不満とするジンナーによる直接行動を引き起こすことになった。

⁵⁰ May 9, 1946, CWMG, Vol. 84, p. 126-127.

⁵¹ ベンガルのノアカリ地方で凄惨な宗派暴動が発生するのは、1946 年 10 月のことである。その後、インド亜大陸の各地に宗派暴動が飛び火してゆくのだが、この独立運動の帰趨についてのガンディーの評価は、稿を改めて検討する必要がある。なお、ノアカリ暴動については、拙稿を参照されたい [外川 2010].

⁵² After May 28th, 1946, CWMG, Vol. 84, p. 225. in *Harijan*, 23, June, 1946. この記事は、5 月 28 日以降のムスリーでの会話を、6 月 23 日号の『ハリジャン』誌に掲載したものである。

⁵³ その後、より直裁なアメリカへの批判として、ガンディーは次のようにも発言している。「私たちの受動的抵抗は、完璧な失敗であったわけではない。私たちは、もうほとんど独立を達成したのだ。私たちが今日、目にしている暴力は、臆病者の暴力だ。しかし、勇者の暴力というものも存在する。もし、4~5 人の男が剣を取って戦いとなり死んだとしよう。それは暴力であるが、それは勇者の暴力である。しかし、1 万人の武装した男たちが、丸腰の人々の村を襲撃し、その妻や子供たちをも道連れに殺戮しつくしたら、それは臆病者の暴力である。アメリカは、原子爆弾を日本に浴びせかけた。それは臆病者の暴力である。」 (CWMG, Vol. 88, pp. 273-275, July 4, 1947)

⁵⁴ インドでも、実験が行われる一週間ほど前から、原爆実験の準備状況が各紙で報道されていた。当時のインド知識人の反応としては、たとえばネルー [Nehru 1946]は、アメリカの原爆実験への驚きと強い非難の声明を同日付で公表した。また、アメリカ

のジャーナリスト・ルイス・フィッシャーは、この実験の行われる1週間前の6月25日にガンディーと再会し、米ソ戦争の可能性について時間を割いて議論している[Fischer 2008: 521-548]。その後、フィッシャーは、7月3日の記事で日本への原爆投下についてのインドの人々の衝撃と怒りに触れると、その背景に白人のアジア人に対する人種的偏見が存在すると考えるインド人の見解を紹介している。そして、ガンディーもまた日本への原爆の使用が日本人の魂を死滅させるものだとして厳しく非難した、と報告する(League sustains first defeat from British, *Free Press Journal*, July 3, 1946) この記事は、アメリカ領事ドノヴァンによって、ただちに本国に報告された(米国国立公文書館, RG59, 845.00/7-1046)。⁵⁵ 公開実験は、特にソ連に対するアメリカの原爆独占を誇示する原爆外交を目的としていた。実験は当初は3回の計画であったが、あまりに甚大な放射能汚染のため2回で中止されている。当時、原爆の破壊力は広く喧伝されていたが、放射能被害に関する医学情報は極秘とされ、実験に従事した米軍関係者でさえも極めて低い安全基準のもとで作業を行っていた。この点については、高橋[2008: 80-91]が詳しい。

⁵⁶ この点については、小野[1977]が詳しい。

⁵⁷ 当時のラッセルの記事は、以下のとおり。The Bomb and Civilization, *Forward (Glasgow)*, 18, August 1945; How to avoid the Atomic War, *Common Sense*, vol. 14, No. 9, October 1945; Peace and Atomisation, *Cavalcade*, 6, October 1945; What America could do with the Atomic Bomb, *Cavalcade*, 20, October 1945; British and the Atomic Bomb, *Guardian*, 7, November 1945; Speech on Atomic weapons and the Atomic Warfare, in Hansard (House of Lords), Vol.138, No. 30, 28, November 1945.

⁵⁸ アメリカによる水爆の製造決定を評価し、対ソ戦での使用の可能性も認めていたラッセルが、それまでの予防戦争論を否定し、人類の平和共存を唱えるようになった思想的転換の背景には、ノーベル賞候補者に指名されたことが指摘されている。小野[1977]によれば、「彼はすでに11月ニューヨークにおいて自分がノーベル賞受賞者に指名されたという報道を受け取っていた。彼が戦争の挑発者としてのイメージを何よりも避けたかったことは、ノーベル賞の性格からしても十分想定しうる。」とされる。

⁵⁹ 2009年4月のプラハ演説で、アメリカのオバマ大統領は、世界の核兵器の廃絶が自分の生きている間には実現が難しい理由として、それが「米国だけではうまくいかない」からだとして述べていた。しかし、1946年の時点では、原子力の技術や経験はアメリカが独占し、当時の大統領諮問委員会のアチソン・リリエンソール報告では、国際機関の一元的な管理によって、その平和利用は可能になると論じていた。すなわちこの時には、ただアメリカ政府のリーダーシップによって、その国際的な取り組みは可能だったのである。

⁶⁰ ガンディーが受賞から外された理由については、なお様々な議論が続いている。ノーベル賞財団はその直接の影響を否定しているが、しかしインドでは、

イギリス政府との関係からその受賞が見送られたとする説が有力である[e.g. 牧野 1999]。ノーベル賞財団のサイトには、その理由を釈明するページまで設けられているので、ノーベル平和賞の政治的性格を表す、典型的な事例であることは間違いないだろう。

(http://www.nobelprize.org/nobel_prizes/themes/peace/gandhi/)

⁶¹ 国内基盤が脆弱であったインド人民党の政権基盤の強化という意味を持った1998年の核実験は、しかしその後、内外の複雑な反応を受けることで、翌年9月の選挙綱領では核実験の成果に触れず、逆に政府は核の先制不使用を宣言することになる。なお、1998年の核実験への評価については、アマルティア・セン[2008]の第12編「インドと核爆弾」が詳しい。その他、堀本[1997; 2002]、伊藤[2007]を参照した。

⁶² 毎日新聞、1998年5月13日。なお、インドの政治家が「ガンディーならば核を保持すべきと述べただろう」と発言しても、それはガンディー思想の流用に過ぎないことは言うまでもない。

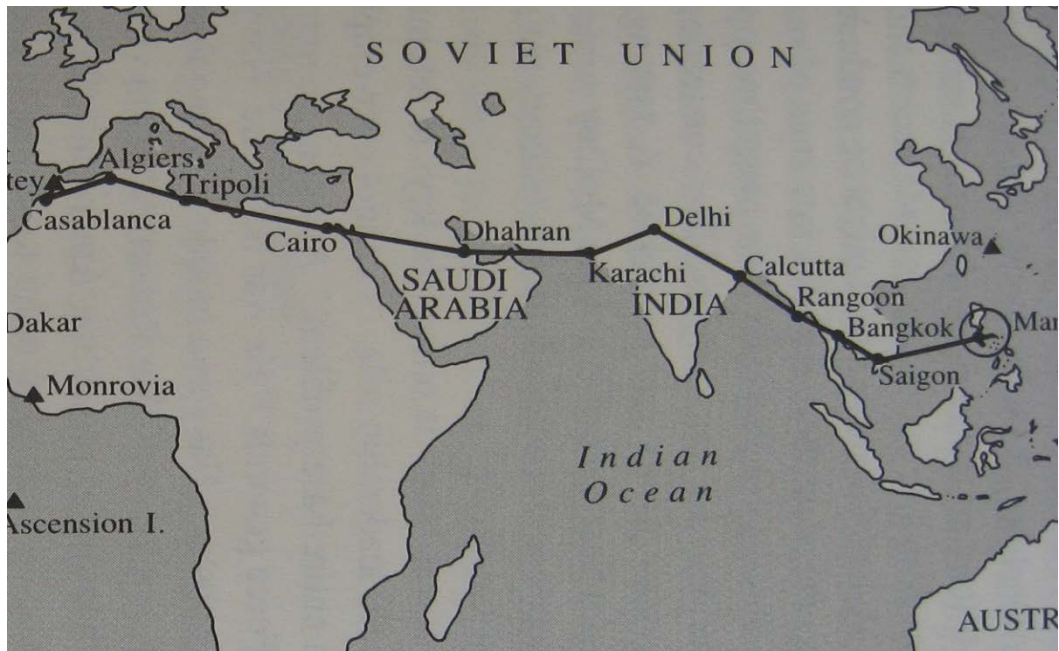
⁶³ Amitav Ghosh, 1998.

⁶⁴ インドの政治家が、ガンディーを踏まえて核保有に言及した最初期の例として、副首相ヴァッラフバーイー・パテルの次の発言がある。「もしある国が、『我々は原子爆弾や原子力を独占しなければならない』と述べたら、他国は『我々はそれに対抗しなければならない』と言うだろう。... ガンディーさんは私たちに、決して臆病になれとは言わなかった。彼は、決して私たちの国を見捨てよとは言わなかった。国家の名誉と自由を放棄せよとは言わなかった。だから私たちは、この国土を守るためにどれほどの犠牲を払おうとも、必要とされる軍隊で自らを武装することを怠ってはならないのだ。」(October 1, 1948, *The Collected Works of Sardar Vallabhbhai Patel*, Vol. XIII, pp. 210-216.)

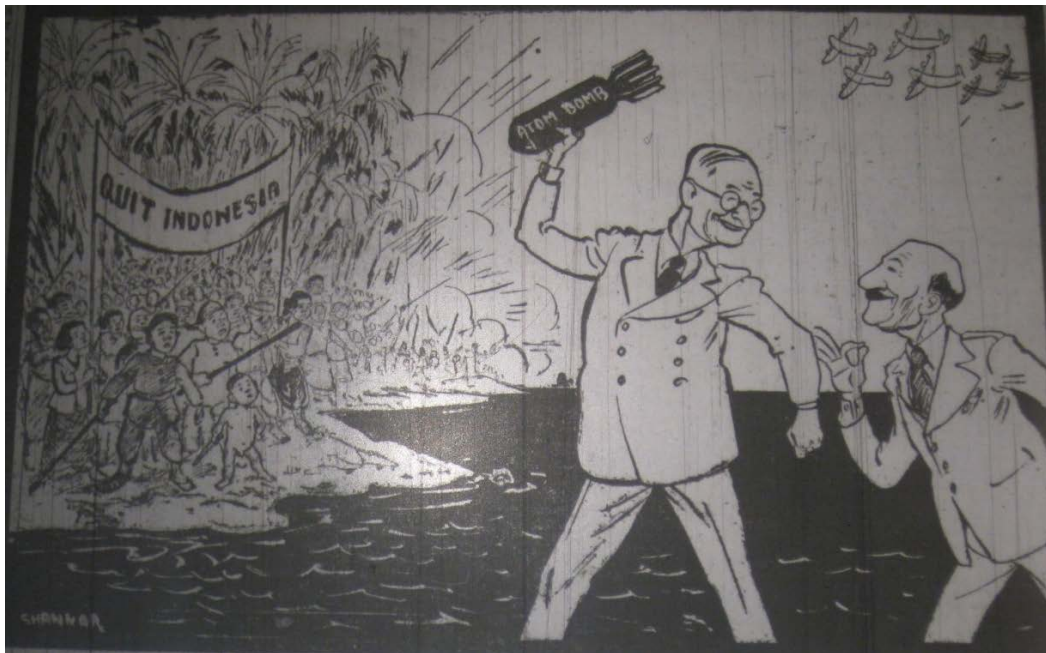
⁶⁵ この時には、ネルーは中間政府の首相となり、独立インドの政治体制が具体的に構想されていた。後に印パの分離独立を導くことになる、ベンガルやビハールでの悲惨な宗派暴動がインドの各地に拡散してゆくのは、翌10月以降のことであった。

⁶⁶ Before September 24, 1946, CWMG, vol. 85, pp. 370-372.

⁶⁷ ガンディーが原子爆弾についての政治的な発言を抑制していた理由を、ローテムントの言葉を借りれば、「政治家としての責務」からだとして説明することは可能であろう。しかし、「顔の表情ひとつ変えませんでした」というガンディーの発言は、「政治家としての責務」とは離れた所で、しかし自らの発言について抑制的に言及している事例として興味深い。ここでは、ガヤトリ・スピヴァクに従って、構造的な暴力によって発言の可能性を奪われた人々の声に応えようとする、ガンディーによる応答責任という観点から、その発言の意味を読み解くことが可能であろう。



図一 インド亜大陸を横断する軍用空路計画（カラチーとカルカッタの航空基地）
 (Leffler, Melvyn. P. *A Preponderance of Power: National Security, the Truman Administration, and the Cold War*, Stanford: Stanford University Press.1992, p. 57)



図二 当時のインドの新聞の風刺画（「インドネシアから出て行け」のプラカードを掲げる民衆に向けて原子爆弾をかざすトルーマン大統領）（*The Hindustan Times*, December 8, 1945.）

資料1 原子爆弾とアヒンサー

原子爆弾によって、他のいかなるものによっても実現できなかったアヒンサー（不殺生、非暴力）がもたらされるだろうと、アメリカの友人たちが話し始めている。彼らの言うことが、原子爆弾の破壊力にいや気がさしたので、世界は、ここしばらくは暴力から遠ざかることになるだろうという意味なら、たしかにそうであろう。しかしそれは、ぜいたくなご馳走を吐き気がするほど食べた人がしばらくはご馳走に背を向けて、むかつきがおさまると、旧に倍する食欲でががつと食べ始めるのによく似ている。まったく同じように、世界はいや気が解消すれば、勢いも新たに暴力に立ちもどるにちがない。

しばしば、悪から善が生まれることもある。しかしそれは、神の意思のなせる業であり、人間のなしえることではない。人が知っているのは、善から善が生まれるように、悪からは悪のみがうまれるということである。

原子力は、アメリカの科学者と軍人たちによって破壊のために利用されたが、他の国の科学者たちが人道的な目的で用いるということも、たしかにありえることだろう。しかし、アメリカの友人たちが言おうとしたのは、このことではない。彼らは、明白な真理が返ってくるような問いを投げかけるほど、単純ではなかった。放火魔は破壊的で極悪非道な目的のために火を用いるが、主婦は男たちに、栄養のある食事を作るために、日々、火を用いるのである。

私がみるかぎりでは、原子爆弾のために、これまで長いあいだ人類を支えていた高尚な感情が滅ぼされてしまったのである。これまでは、いわゆる戦争の法則というものが存在し、なんとか戦争を耐えられるものとしてきた。けれど、

いまや私たちには、戦争の真実がむきだしにされている。戦争には力の法則以外にはなにもない。原子爆弾は、連合国の武器に空虚な勝利をもたらした。そして、ここしばらくのあいだ、日本の魂は破壊されてしまっている。爆弾によって壊滅された国民の魂にどのようなことが起こるのか、それを見きわめるにはまだ時間がかかる。

さまざまな自然の力は神秘的に作用するものである。これについて私たちは、類似した出来事から生み出される既知の結果から未知の結果を推論しながら、神秘を解くことができるだけである。奴隷所有者が奴隷をつないでおくためには、奴隷を入れる檻の中に、自分か代理人が入らなければならない。日本が下劣な野心を実行しようとして犯した犯罪を私が弁護していると、早合点しないでほしい。違いはただ程度の差であった。日本の強欲のほうがいっそう下劣であったとしても、しかしだからといって、日本の特定地域の男、女、子供たちを、情け容赦なく殺戮するという下劣なことをやってよい権利は、誰にも与えられていなかったのだ。

原子爆弾がひき起こした最大の悲劇から正しくひきだされる教訓は、ちょうど暴力が対抗的な暴力によっては打ち破られないように、原子爆弾も原子爆弾の対抗によって滅ぼされることはないということである。人類は、非暴力によってのみ暴力から脱出しなければならない。憎しみは愛によってのみ克服される。対抗的な憎しみは、ただ憎しみを深め、その範囲を広げるだけである。私は、自分がこれまで幾たびも口にし、また私の能力の限りをつくして実践してきたことを、改めて述べていることは承知している。私が初めて述べることも、それ自体、何も新しいことではない。それは、山のよ

うに古くからあることなのだ。私はただ、陳腐なことわざを言うのではなく、私が心に固く信じていることを、はっきりと表明したにすぎない。60年間の人生の様々な場面における私の実践は、この信念をますます豊かなものとし、私の友人の経験がそれを強固なものとしてくれた。それは、真理の中核をなすものであり、そ

れによって人は、ひるむことなくひとりで立つことができるのだ。何年か前に、マックス・ミュラーが述べたこと、すなわち、信じない人がいるあいだは、真理はくり返される必要があるということ、私は確信しているのである。

Poona, 1-7-'46. in *Harijan*